

☆週刊沖縄建設新聞に掲載されました

建築 & 土木科女子生徒集結

女性技術者と対話し未来を想造する☆

週刊

沖縄建設新聞

THE OKINAWA KENSETSU SHINBUN

■毎週水曜日発行 ■昭和40年7月7日第三種郵便物認可 ■発行所：(株)沖縄建設新聞 ■http://www.okitel.com



女性技術者から話を聞く様子



女子生徒と美ら小町のメンバー

女性技術者と女子高生が交流会

「職人さんは怖いイメージもあるけど、意外と優しいよ」―作業着姿の女性技術者たちが女性目線で建設現場の業務について女子高校生たちに語りかける。12月1日、那覇市の沖縄工業高校で開かれた交流会は、将来の進路を真剣に考える工業高校の女子生徒と建設業の魅力を懸命に伝える女性技術者らの思いが重なり、最後まで活発な意見交換の場となった。

建設業の仕事内容、女性目線で解説 現場環境の疑問や不安解消図る

交流会は、県土木建築 mけんせつ美ら小町メン
部が将来の建設業界を担 部の女性技術者と県の
人材確保などを目的に 職員らがサポート役を
開催し、沖縄工業高校土 木科と建築科の女子生徒
18人が参加した。tea 解説、職業としての建設

業の魅力ややりがいなどを丁寧に説明し、入職を呼びかけた。
会場となった沖縄工業高校の教室では、生徒と技術者が4つのテーブルに分かれてグループトーク。資格取得について、

「現場で働きたい」と思っている女子生徒は、学校では聞きづらいことを女性技術者に直接聞いて貴重な体験になった。女性であることで困ることはなく、女性も活躍できる仕事だと分かり安心した」と感想を述べた。

土木科1年の幸地姫那歌さんは「家族が建設関連の仕事をしているが、女性技術者と話すことはなかった。土木工事にも様々な現場があること

ことで困ることはあまりない。業界は力仕事のイメージが強いかもしれないが、施工管理など女性でもできる仕事も多い」と説明。「快適トイレの導入など、女性でも働きやすい環境に改善され、現場で働く女性も増えてきている」と現場の実情を伝えていた。

交流会を見守った沖縄工業高校の宮平勝史教頭は「現場の第一線で働いている女性技術者の皆さんと話すことで、授業だけでは分からない疑問や不安が解消できる良い機会となった。生徒たちが建設業に入職して5年後、10年後に後輩たちに建設業の魅力伝えるような技術者になることを期待している」と話した。また、交流会に参加した建築科2年の宮城美希さんは「現場で働きたいと思っているので、学校では聞きづらいことを女性技術者に直接聞いて貴重な体験になった。女性であることで困ることはなく、女性も活躍できる仕事だと分かり安心した」と感想を述べた。

交流会は、県土木建築部が建設産業の人材育成確保の一環として取り組んでいるもので、(一社)沖縄しまて協会の県から業務を受託し、事前アンケートや当日の進行などのコーディネートを担当した。

交流会を見守った沖縄工業高校の宮平勝史教頭は「現場の第一線で働いている女性技術者の皆さんと話すことで、授業だけでは分からない疑問や不安が解消できる良い機会となった。生徒たちが建設業に入職して5年後、10年後に後輩たちに建設業の魅力伝えるような技術者になることを期待している」と話した。また、交流会に参加した建築科2年の宮城美希さんは「現場で働きたいと思

ては、「働きながら資格取得は難しかったため、学生のうちに取れる資格は取っておいた方がよい」とアドバイス。建設現場の環境に関しては「働く上で、女性だからという

や、どの企業も資格を重視することが分かった。県外で土木施工管理の仕事に就きたいと思っているので、今日の交流会で聞いたことを将来につなげていきたい」と笑顔を見せた。

美ら小町のメンバーとして参加した榎大米建設の後藤公子さんは「どの生徒も明るく積極的に質問してくれたので、将来の建設業を担う人材として頼もしく感じた。働く上でいろいろな場面で迷うこともあると思うが、自分を信じ頑張りたい」と期待を込めた。榎大興建設の石川桜さんは「自分も工業高校出身だが、このように女性技術者と接する機会がなかったため、良い経験になったと思う。自分の経験から、辛く苦しい時は一人で悩まず、誰かを頼るようにアドバイスした。また交流する場があれば積極的に参加したい」と意欲を見せた。